
家の居候はニートで魔法使い

東雲 秋葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家の居候はニートで魔法使い

【Nコード】

N1983Y

【作者名】

東雲 秋葉

【あらすじ】

学校から帰ってきたらそこには悠々とせんべいを食べお茶を啜る魔法使いのような格好をした女の子がいた。なんでも向こうの世界で働くのが疲れたからこっちの世界に移してきたらしい。いや、意味わからないから。そんな理由で家に住まわせるとか言われても・・・。平凡な男子高校生と異世界からやってきた魔法使いの女の子との生活が始まる。

一話：帰ってきたら居たのですが。

学校も終わり帰宅する。如月空志は自宅のドアのカギを開けどアを開き自宅に入る。

「ただいまー。」

現在父親の海外出張に母親が付いて行ってしまったために両親とも不在だが、どうも一度習慣となってしまったものはなかなか治るものではないし、特に治そうとも思わない。

しかし、今は帰ってくるはずのない挨拶に

「おかえりー。」

と言う返事が返ってきた。どうやら居間からのようだ。

「おかしいな、戸締りは完璧なはずなのに・・・まさか泥棒か！でも普通泥棒が『おかえりー』なんて言うか？」

そして全ては居間に行けば分かるという結論を出し、急いで居間へ行くことにした。

襖を勢いよく開ける開け

「人の家に勝手に入る不法侵入者は誰だーーーーー！」

と叫ぶと

「あ、どうもお邪魔してます。」

せんべいを咥えこっちを振り返る、まるで魔法使いの格好をした女の子がいた。

あまりのフレンドリーな返しに多少ずっこけはしたけど、取り敢えず話をしない事には何も始まらないな。

「こんにちは、いやもうそろそろ六時だし、こんばんはかな。僕の名前は如月空志。君の名前は？」

「私の、ポリッポリッ、名前は、ポリッポリッ、ズズーッ、ゴッ

クン、フェイメル・アンジェリーナ・マスコツティアです。フェルと呼んで下さい。」

「おい、自己紹介の最中にせんべい食って、お茶を啜る奴が何処にいる?」

「ほう、この丸く、平たく、固く、食べるとボリボリと音が鳴るのは『せんべい』と言って、この透き通った緑色の液体は『お茶』と言うのですか。とてもおいしいです。」

ツッコミも虚しく、彼女は再びせんべいを食べ始める。と言うか人の話くらい聞けよ……。

数分後

「―それにしても似合わね。」

空志は心の中で愚痴を零し、溜息をする。

そうれもそうだ、目の前のせんべいを食べ、お茶を啜る彼女の容姿について説明すると、

・見た目：小学五、六年生

・髪：銀色

・目の色：紫色

・格好：魔法使いスタイル?

結論・・・そりゃあ似合うはずもないか。

おっと、こんな事を考えていても話が進まない、彼女について聞くことはまだまだ沢山あるのに。

「フェルちゃん。食べてる途中悪いんだけど、少し質問してもいいかな?」

「はい、どうぞ。」

「出身は?」

「アナスタシア国です。」

「・・・出身は?」

「アナスタシア国です。二度も言わせないでください、記憶力が

ないのですか？」

「へー、アナスタシア国って言うんだ。じゃあ年齢は？」

「女性に年齢を聞くのは大変に失礼な事ですがいいでしょう、年齢は二十五です。」

ゴン！！額が机に直撃し鈍い音が鳴る。その姿で二十五っておかしいだろ・・・。

「どうしたのタカシ？」

「いや、なんでもないよ。最後の質問、職業は？」
「魔法使い。」

その言葉を聞くと僕は無言で立ち上がり居間を後にし、階段を上り、自分の部屋に入り、ベッドへと倒れ込む。

拝啓お父さんお母さん。家に自称魔女の不法侵入者が来ました。一体どうすればいいでしょうか。

「とりあえず寝よう、お風呂は・・・明日の朝シャワーでいいか。」

そう呟くと空志は現実逃避をするために深い眠りにつくことにした。

一話：帰ってきたら居たのですが。（後書き）

初めて長編を書かせて頂きます。まだまだ至らないところもあると思いますが、応援の程よろしく願います。

二話：親が帰ってきたのですが。

時間というものは無慈悲なもので、どんなに現実逃避しようとも結局は朝が来る。

「はあー。」

昨夜の事を思い出し思わずため息が出る。

出来れば夢であってほしい。そう思いながらシャワーを浴び居間へ行くことにする。

「やっぱりいるか・・・。」

いた、いたよ。彼女は器用に座布団を枕にしてスヤスヤと寝ていた。何とも無邪気な寝顔の事が、とても二十五歳？とは思えない。とは言っても見た目は十二歳くらいなのだが・・・。

そんな事を考えていると

「・・・う・・・ん・・・。」

おっと、目を覚ましそうだ。彼女は若干寝ぼけながらもこちらの姿を確認する。

「ふぁ、おはようございましゅ。」

・・・呂律が回っていないのか上手く話せていない。

「フェルさんおはようございます、取り敢えずそれでも飲んで目を覚ましてください。」

そう言ってお茶を出す。

彼女はお茶を飲み終わると顔を俯かせ、暫く沈黙する。

時間にして三十秒位たった後こちらを見つめる。

「改めて、おはようタカシ。それと聞きたい事があるのだけど時間は大丈夫かしら？」

「う・・・うん。そうだその前にシャワーでも浴びてきたらどうかな？」

どこか嫌な予感がしたので話題を変えることにする。どちらにせよ後で追及されることには変わらないのだが、それでも幾らか考え

彼女がシャワーを浴びている間に昨日の事について改めて考えてみる。

名前はフェイメル・アンジェリーナ・マスコツティア、年齢は二十五歳、出身国はアナスタシア国、職業魔法使い。

・ ・ ・ どのゲームキャラだよ。名前はともかく何だよアナスタシア国って。俺の知る中でこの地球上にそんな国無かった筈だ。新しくどこかの国から独立でもしたのか？でもそんな事が実際あったとしてもニュースになる筈だしテレビで報道されるに違いない。いや待て、その前に最も重要な疑問がなかったわけ。彼女のビジュアルプロフィールに動揺しすぎて忘れてしまったかもしれない。

あ、彼女どうやって家に入ったのか聞いてないや。

「……わすれてた————つ——！！！！！」

僕、昨日に続いてこんなに叫んでるけど近所迷惑になってないかな……。まあどうでもいいか。

「タカシ、一体どうしたの!？」

浴室から俺の絶叫を聞いたフェルさんが駆け付けたようだ。

俺はフェルさんの姿を見ると彼女の肩をガシッと掴み

「フェルさん！」

「な……何かしら？」

「あなたに聞きたい事があります！」

「は……はい。」

「フェルさん！貴女どうやって僕の家に入ってきたのですか？」

何とか聞きたかったことを聞け、そして先程思いつき叫んだので息を切らしていたところ

ピーンポーン、ガチャツ

「たかしー、元気になってたかあ!？」

「たかちゃん、一人で寂しくなかつ・・・。」

両親が帰ってきました。彼らの語尾が上がてしまったり途中で途切れてしまうのも無理ないでしょう。客観的に現在の僕たちの様子を見ると

凄い剣幕な表情をした男がバスタオル一枚の幼女の肩を押さえ息を切らしている。

不味い、何とかこの状況を打破しなければ僕の立場やら何やらが色々アレだ。

「父さん母さん取り敢えずお帰りなさい！今こんな状況になつているのは僕が決してアレな性癖なわけじゃなくて・・・取り敢えずこつちでじっくり話し合いましょう！」

僕が突然帰ってきた両親に必死の言い訳をしているが、彼らはどうやら僕ではなく僕の目の前にいる彼女を見ているようだ。そして

「ケイスケ、ハルカ、お邪魔しているわ。」

「ありや、フェルさんじゃねーか。」

「あらフェルちゃん、いらっしやい。」

・・・へ？

二話：親が帰ってきたのですが。（後書き）

二話目です。おそらく次の話で両親とフェルさんとの関係、フェルさんが何者なのか分かるのではないでしょう。感想・ご意見など頂けると作者は感激です。

三話：説明してもらったのですが。

「さて、とりあえずどこから説明してもらいましょうかね。」

現在僕たちは居間のテーブルに僕・フェルさん、向かい合って父さん・母さんと座っている。

蛇足だが今フェルさんはあれ以外に服を持っていなかった為に母さんのお下がりを着ている。

「ではまずはフェルさん。」

「なにかしら？」

「さっきの質問について答えて貰えますか？」

「さっきの質問と言うと、家が閉まっていたのにどうやって入ってきたか、でいいのかしら。」

「はい、そうです。」

「そんなのこの家のこの居間の座標に合わせて『転移』してきたからに決まってるじゃない。」

今度は『転移』ときたか……。

「そうですか。」

僕は半ば諦めた風に答える。昨日は認めるのが嫌になり現実逃避で寝る、という手段をとったが、もう認めなければいけないのかもしれない。この世界とはまた異なった、異世界がある事。そしてこの世では古くには使われてはいたかもしれないが、今ではもはやSF小説とかでしか言葉も出てこない『魔法』という存在を……。

とりあえず今は質問を続けることにする。

「じゃあ二つ目。父さん、母さん。」

「なんだ？」

「なに、たかちゃん？」

「フェルさんとの関係は？と言うか海外出張中じゃなかったの？」

「フェルちゃんとはお友達よ。」

「まだ出張中だが。」

と父さん。

「ええ、二人とは交友関係にあるわ。」

とフェルさん。

「……いやお友達つて、フェルさんは異世界から来た人ですよ？」

何か嫌な気がするがこれは聞かなければならない事であると思い、意を決して聞くことにする。

「ああ、その事か。それはだな、俺はお前くらいの時に何の事故か知らんが異世界に転移してしまい……。」

「私は異世界出身の人間なのよ。ちなみに海外出張の出張先は私の故郷でもありフェルちゃんの出身国でもあるアナスタシア国よ。」

衝撃の事実、父さんは異世界に飛ばされてそこでお母さんに会って結婚したと言う。父さん、あなたはどこそのRPGの主人公か何かですか……。とうか出張先が異世界つて、それは海外出張じゃなくて界外出張なんじゃ。あ、僕の漢字の変換ミスか。まあ異世界なんてファンタジーな存在、普通の人には分からないだろうし。

……。もう考えるのが面倒になりつつある自分です。今なら何でも受け入れられる自信がある……。かも！

「あれ？そういえばたかちゃん。」

「ん、何？母さん。」

「そう言えば学校は行かなくていいの？もうこんな時間だけど……。」

母さんにそう言われ時計を見る。……。現在午前八時五十分。ホームルームも終わり一時間目が始まるまで後十分といったところだろう。

前言撤回、やっぱり受け入れたくない事実もあります。

「学校……。休むか？お前も俺たちに聞きたい事とか色々あるだろうし。」

そう優しくフォローしてくれる父さん。優しさが胸に沁みわたり

ます。

「……うん、そうする。とりあえず学校に連絡してくる。」
もう学校に行く気力なんて残っていませんよ……。

学校にも無事？に連絡し終わり、再び居間へと戻る。

「おかえりなさい、タカシ。」

「ただいまフェルさん。……あれ、父さんと母さんは？」

「二人ならアナスタシア国に戻ったわよ。『フェルちゃん後の事はよろしく。』って。まあ別にいいけれど。」

『あいつ等次に会ったときは只じゃ済まさない』と小声に聞こえたのはきつと空耳だろう、そう言う事にしておきたい。

「……で、タカシ。朝の続きなのだけど……。」

「そうだフェルさん！僕もつとフェルさんの事とかそつちの世界の事について聞きたいな！」

僕のターンはまだ終了……以下略。その話題については触れさせてはいけない気がするんだ。

「話題を変えようとしても無駄よ。タカシ、どうしてあなたは昨日私のお話を無視してこの部屋から出て行ったのかしら？」

フェルさん、見た目幼女なのに笑顔がとても素敵で……怖い！

「いや、ほら、あの、誰しも認めたくない物ってあるじゃないですか。」

「ええ、あるかもしれないわね。……で、理由はそれだけなの？」

「はい！それだけです！すいませんでした！」

「なんか凄く潔いわね……。まあいいわ。突然この家に来た私にも非はあるのだし。」

「あつ！そうだフェルさん。」

「何かしら？」

何だかんだ言っただけを聞かなくちゃ何も始まらない気がする。

「何でこの家に転移してきたの？」

そう尋ねるとフェルさんは今までに見た一番綺麗（敢えて可愛いとは言わない、だって怒られそうだし。）な笑顔でこう言った。

「それはね、働くのが嫌になったからよ。だって働くの疲れるんだもの。これからお世話になるわ。二人にも許可は取ってあるから安心して。ああそうだ、まだ朝食を食べていなかったわ。タカシ早速朝食の用意を・・・。」

・・・どうやら家に二ートな魔法使いがやってきたようです。

三話：説明してもらったのですが。（後書き）

ようやく居候生活がはじまります。それにしてもフェルさんのキャラが安定しませんね……。感想ご意見などお待ちしております。

四話：居候生活が始まったのですが。

フェルさんが家に住み始めた次の週の土曜日。

「どうか、家の生活には慣れた？」

僕はご飯を食べる手を止めてフェルさんに尋ねてみる。現在は朝食の時間だ。

「ええ、まあ何とか。・・・でもまだ『これ』は駄目ね。」

そう言って彼女は手に持っている『これ』、橋をまるで敵の様に睨んでいる。

・・・それにしてもあの時はすごかったなあ。

フェルさんが正式に家に住むことになった（とは言っても、ただ前日は自分が勝手に現実逃避で布団に潜り込んだだけなのだが）その日の夜。

「フェルさん。そろそろ夕食にしようと思うんだけど、何か食べたいものはある？」

異世界の食文化について全く知らないので、取り敢えず聞いてみることにする。

「いえ、特には無いわ。タカシに任せます。」

任せるか・・・。さて何にするか。

そう言って冷蔵庫を開けて中を確認する。

「この材料は・・・和食メインだな。」

こうして作った料理は

・ご飯

・味噌汁（ワカメと豆腐）

・鰯の塩焼き

・キャベツと大根のサラダ

まあ、これでいいかな。

こうして夕食の準備も終わり、料理もテーブルに並び終える。

「よし、じゃあ食べようか。頂きま……。」

「タカシ。ちよつといいかしら？」

頂きますと言おうと思ったのだが、途中でフェルさんに呼び止められる。

「あれ、何か問題でもあった？」

やつぱり並べられた料理についてだろうか、恐らくどれも口にした事の無い物ばかりなのだろう。

「料理の方は、まあこちらと向こうとでは文化の違いもあるかもしれないし、予想はしていたのですが……、ナイフとフォークとスプーンも無しにどうやって料理を食べるのですか？」

「へ？」

何か僕の予想とは違う質問が来たぞ。

「いや、だからナイフとフォークもとスプーンも無しにどうやって料理を食べればいいのですか？」

「いや、箸ならそこにあるじゃないか。」

「……箸？この事。」

そう言つてフェルさんは箸を……両手に一本ずつ取った！？

「まさかあなたの国ではこれがナイフなどの代わりを……。随分と変わっていますね。」

フェルさん、顔が引きつってますよ。もしかして、箸を知らないのだろうか。

「いいですかフェルさん、これは箸といって僕の国ではこれが料理を食べるための道具となっています。もちろん僕の国でもフォークやナイフなども使いますが、このような料理の場合は主にこの箸を使います。」

「へえ、そうなの。」

彼女はそういうと、再びナイフとフォークの要領で鰯の塩焼きに刃？を、ってだから

「そういう風に使う物じゃない……！」

「な……何!？」

もう駄目だ、これは夕飯を食べている場合じゃない。

「分かりました。フェルさん！」

「は、はい！」

「これから箸の使い方を教えます！」

——如月空志の箸講座——

「では、フェルさん。これから箸の使い方を教えます。」

「ええ、よろしく願います。」

「まずは箸の歴史から。」

「タカシ、それは箸を使うのにあたつて必要な事なのかしら？」

「・・・ではまずは箸の持ち方から説明します！」

一：箸の片方を親指の根元に挟みます。

二：薬指を軽く曲げ、第一関節の上にして親指と薬指で支えます。

この箸を『固定箸』といいます。

三：もう一つの箸は親指の腹で挟み、中指の第一関節で支えます。

こつちの箸は『作用箸』といいます。

四：作用箸の支えをしつかりさせるために小指を薬指に添わせませす。

じゃあフェルさん、やってみて。」

「わかったわ。えっと、こつちの箸を挟んで・曲げて・支えて、

もう一本の箸を挟んで・支えて・添わせる。・・・こんな感じが

しら？」

そう言つてフェルさんはちよつぱりご機嫌な様子で僕に箸を見せる。何だか子供に箸を教える気分だな、本当は僕より年上の箸なんだけど・・・。とは言つても見た目が見た目だからなあ。

「・・・何か変な事考えてないかしら？」

何だと、僕の考えている事が分かるのか！？

「顔に出ているわ、『変な事考えています』ってね。」

「別に変な事なんて考えて無いですよ。ただ年上の人に箸の持ち方を教えている筈なのに子供に箸の持ち方をおしえ・・・いたつ、ちよ、本当に痛いんですって・・・すいませんでしたーっ！！！」

箸の先端で容赦なく突いてくるフェルさん。「これはなかなか」
って新しい箸の使い方を考えてしまった様です。

「いたたた。容赦ないな。じゃあ次に箸の使い方について・・・
はもう新しい使い方を考えてしまったようだし・・・いえ、ちゃんと教えますよ！」

フェルさんの目が本気だったのもうボケるのは止めにします。

「では箸の使い方について。

上の箸を下の箸から離し、人差し指と中指を動かして作用箸を上下に動かします。二本の箸を両方動かさず『下の箸をしっかりと固定し、上の箸を動かす』これを意識してやってみて下さい。」

そう言われ、やってみるフェルさん。がどこか動きがぎこちない。

「これは・・・難しいわね。」

「まあ焦らずにゆっくりやって行きましょう。」

「そうね、そうするわ。・・・それにしてもタカシ、あなた人に説明するのが上手ね。」

「ええ、まあ『これ』見てましたから」

そういつて手に持っていた『スマートフォン』を見せる。

「確かそれ、ケイスケが言ってた『カンニング』ってやつじゃないの？」

「いえ、別にテストをしている訳じゃないですし。」

「それもそうね。」

そして同時に笑い合う。・・・が。

「説明している内に料理が冷めちまったじゃねーか！」
今頃思い出した僕であった。

「そんなことがあったわね。」

「いや、あったわね。って一週間前の話だけど・・・。」

「別にいいじゃない。でどうかしら今の私は？」

目の前にはまだ少しぎこちないが箸を使ってご飯を食べるフェルさん。

「うん、前よりも箸の使い方上手になったと思うよ。」

「そう、ありがとう。」

そう言つとフェルさんは優しく微笑んだ。

四話：居候生活が始まったのですが。（後書き）

四話目です。フェルさんの世界には和食が無かったようですね。箸の持ち方、使い方については「和食普及委員会・お箸が正しく持てますか?」(<http://www.wasyokuken.com/cstick/index.html>)を参考にさせていただきました。感想、ご意見などお待ちしております。

第五話：フェルさんの一日に関してですが

フェルさんとの生活が始まり早一ヶ月。彼女もここでの生活に慣れたみたいで・・・、

パリッ、ズブーッ。

と寝ところがりながらせんべいを食べ、お茶を啜り、そしてテレビを見ています。まあ、もう随分と寛いでますね。

そんな彼女を見ていて、ふと思ったことがある。

・・・フェルさんって普段どんな事をして一日を過ごしているのだろうか。

「ねえフェルさん？」

「何かしら？」

「フェルさんって、いつも何して過ごしてるの？」

「死になさい。」

「・・・え？」

「あら御免なさい、つい本音が・・・じゃなくて口が滑ってしまったわ。駄目よタカシ、女性のプライベートを無闇に聞いては。」

「はあ、すいません。」

「気を付けないと駄目よ。そうでないと何時か勢い余って『ハア、ハア、フェルさんのパンツ、今日、何色？』って言ってしまうかもしれないわ。」

「言わないよ絶対そんな事！？」と言うか洗濯物すべて僕に押し付けている人が何を言うか。」

「・・・はっ！まさか。タカシあなた『わーいフェルさんのパンツ、クンカクンカしちゃうお』みたいな事を、なんてエッチな人なの。」

何かもう疲れたんでスルーしていいっすかね？

「まあ冗談はここまでにして。いいわ、タカシには教えてあげましょう。」

―ここからはフェルさん視点―

はい、どうも。フェイメル・アンジェリーナ・マスコツティアよ。タカシが私の生活が知りたいようなので紹介するわ。・・・とは言っても何だか面倒ね。まあ適当にこんな感じでいいかしらね。

○月？日

タカシが学校へ行った。取り敢えず帰ってくるまで寝ておく。

○月 日

取り敢えず起きているのが面倒なので寝る。うつ・・・何だか体がかゆい。

○月？日

カユ・・・ウム「言っちゃだめだー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！（タカシ）」

「タカシ一体どうしたの。何か不満でも？」

「いや、不満しかないから！何なの『カユ・・・ウ●』って。」

フェルさんはウイルスにでも感染してゾンビにでも成っちゃったわけ？」

「タカシ、それは間違っているわ。」

「へ？」

「私の場合、ゾンビを倒す方だから。私にかかれば杖の一振りでゾンビの十匹二十四匹楽勝よ。」

「デスヨネーって、そう言う事を言ってるんじゃないくて。」

「なくて？」

「僕はちゃんとフェルさんの事が知りたいんです……って僕は何を言っているんだ……！」

「ええ、分かつわ。タカシの誠意に答えてちゃんと教えるわ。・
・タカシって大胆ね。」

では改めて、フェイメ（ry。 何だか名前言うの疲れたわ。それに何だかインパクトが足りないわ。今度から自己紹介するときは「はい！皆さんこんにちはー！皆のアイドルフェルちゃんだよー」とでもしようか……。タカシ、そのこの世の終わりを見ているかのような目は何かしら？まあいいわ。後で拷も……お仕置きね。それは兎も角、まずは私の一日でも紹介しましょう。

——フェルさんの一日——

AM 06：30 タカシに起こされ起床。

AM 07：00 シャワーを浴びた後、朝食

AM 07：40 朝食終了、タカシは学校へ行く。

AM 07：50 二度寝開始。

AM 11：00 二度寝から目が覚める。テレビを見る（せんべいとお茶は必須）。

PM 12：00 昼食（タカシが朝食と一緒に用意しておいた）。

PM 13：00 朝食終了、食休み。

PM 14：00 散歩に出かける。「お婆ちゃん、おかしー！」

PM 16：00 散歩から帰ってくる。お昼寝。この後16：30位にタカシが帰宅。

PM 17：00 お昼寝から目が覚める。読書。

PM 19：00 夕食。夕食後まったりとテレビを観たりタカシとお話とかして過ごす。

PM 21:00 入浴。大体一時間位。
PM 22:30 就寝。

だいたいこんな感じね。

―フェルさん視点終了―

これを見て僕は啞然とした。だって・・・、
「・・・何かもうあれだね、食べるか寝るかテレビ観るしかしてないね。」

そう言うつと。フェルさんはもう素敵な笑顔で

「何か文句でもあるのかしら？」

と返してきた。この笑顔の前には何も言えないけど、フェルさん二十五歳だよ、働き盛りの人がこんな生活つてどうよ、もうあの一言に尽きるしかないじゃないか。

「・・・ニート。」

「・・・ん、何か言った？」

「いや、何でも無いよ。」

危ない、聞かれるところだった。まあフェルさんニートなんて言葉知らないと思うけど。

「ねえフェルさん。」

「何？タカシ。」

「ここでの生活、楽しい？」

「そうねえ・・・。」

静かに目を閉じ考え込むフェルさん。そして、

「ええ、とても。タカシは、どう？」

僕は・・・。

「まあ、退屈はしないな。」

取り敢えず今はそう答えることにした。

第五話：フェルさんの一日に関してですが（後書き）

作者「なあフェルさん。『お婆ちゃんおかしー』って何だ？」

フェル「いや、外を歩いてい居ると道すがら『お嬢ちゃん、お菓子たべるかえ？』って何か渡されるのよ。」

作者「まあその口りな容姿じゃ無理も・・・『逝きなさい』・・・ウボベラアッ！」

作者は になりました。感想ご意見などお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1983y/>

家の居候はニートで魔法使い

2011年11月15日01時34分発行